

令和3年2月長浜市教育委員会定例会 会議録

I. 開催事項

1. 開催日時

令和3年2月18日(木) 午前10時00分～午前11時47分

2. 開催場所

教育委員会室(長浜市八幡東町632番地 長浜市役所5階)

3. 出席者

教育長 板山 英信
委員 西橋 義仁(教育長職務代理者)
委員 美濃部俊裕
委員 宮本 麻里
委員 中村 亜紀

4. 欠席者

委員 廣田 光前

5. 出席事務局職員

教育部長	酒井猛文
次長兼教育総務課長事務取扱	鵜飼康治
次長	清水伊佐雄
教育改革推進室長	武石晶子
教育指導課長	伊藤浩行
すこやか教育推進課長	大田久衛
幼児課長	山口百博
教育センター所長	野村幸弘
教育総務課長代理	今井健剛

6. 傍聴者

なし

II. 会議次第

1. 開 会

2. 議 事

日程第1 会議録署名委員指名

日程第2 会議録の承認

日程第3 教育長の報告

日程第4 議案審議

議案第4号 議会の議決を経るべき教育関係議案に関する意見について

日程第5 協議・報告事項

日程第6 その他

3. 閉会

III. 議事の概要

1. 開会

教育長から開会宣言があった。

2. 会議録署名委員指名

西橋委員、美濃部委員

3. 会議録の承認

1月定例会

特に指摘事項はなく、1月定例会の会議録は承認された。

4. 教育長の報告

教育長：3学期に入りましてから、市内の校園で連日のように、子どもたちも含めてPCR検査を受ける状況が続きました。しかし最近になりまして、徐々にではありますが、減少に転じつつあるという状況でございます。

2月10日に、教育研究発表大会をオンラインで実施いたしました。当日は長浜小学校を会場とし、各校園にZoomで内容を配信しました。例年よりたくさんの方々に講演を聞いていただき、画面を通して各校園の意見交換ができたという点は、非常に有効だと感じました。

従来の開催方法ですと、ごく一部の先生方しか参加できませんが、校園にいながらそのまま参加できるという点では、非常にいいと思いました。挨拶や開会行事等は録画したものを流しました。表彰については、別日に市役所で賞状をお渡ししました。大変若い先生方が多かったです。自分で課題意識を持って、いろんなことを実践してそれをまとめるということは大変重要だということを改めて思ったところでございます。

2月に入りまして、県内県外の高等学校の入学試験も行われました。県内の私立の高校は、2月4日、5日。公立高校の推薦、特色選抜等は2月8日、9日。県外の私立は、岐阜は一部日程が違うようですが、京都方面は2月10日あたりに実施されております。幸運なことに、長浜市内の各中学校においてコロナ関連で入学試験に影響があったということは聞いておりません。3月の一般入試まで無事に終わってほしいと思います。

5. 議案審議

「議案第4号 議会の議決を経るべき教育関係議案に関する意見について」は、市議会で審議される前の情報であり、公にすることにより市民等の間に混乱を招くおそれがあることから、地方教育行政の組織及び運営に関する法律第14条第7項の規定に基づき非公開としたい旨の発議が教育長よりあり、委員の全会一致で可決された。

議案第4号 議会の議決を経るべき教育関係議案に関する意見について（会議非公開）

教育長は事務局に説明を求め、関係所属長から資料に基づき説明があった。各委員とも異議なしということで、原案どおり同意された。

6. 協議・報告事項

審議案件なし

7. その他

教育長：委員の皆様も学校に訪問していただいていますので、そのことに関連してでも結構ですので、一言ずつお願いします。

美濃部委員：みんな落ちついてきましたね。いろんなことがあると聞いていますが、先生方も努力いただいて、小学校も中学校も落ち着いているところが多いように感じました。

西橋委員：校長先生が帰り際の廊下でふと漏らされる言葉が気になりました。ある中学校へ行ったときに、何人かの小学校の校長から、学級崩壊が起きたと聞いているとおっしゃいました。校長先生同士でそういう話が出ているということは、実際は小学校の学級経営で御苦労なさっている先生方がたくさんおられるのではないかと思います。管理職はもちろんですが、教育委員会もそのことをしっかり受け止めて、そういうところに焦点を当てた指導をするのが大事ではないかと思います。

美濃部委員：私も学校訪問で、あっと思う学級はありました。どちらかというところと低学年です。高学年や中学校はきちんとしているのですが、活気がないという部分も感じたので、表現力とか発言という部分をもっと活発にしてほしいと思いました。

中村委員：オンラインで別の学校とつながっているという小規模校がありました。小さい学校だからこそできるということもあり、その学校の特色を出そうと頑張っておられるように感じました。

先生方も小規模校であることをしっかり意識し、中学校へ上がったときに差が出ないようにしてあげたいということで、学習を頑張らせていただいている

ました。

宮本委員：小学校一・二年生の子どもたちは、どの学校でも目がきらきらしていて、すごく積極的で元気なところが多いと思ったのですが、三・四年生になるとそれがなくなるように思いました。先生の話をちゃんと聞いているからということでしょうが、授業のときももう少し自分を上手に出せるような感じが残っているといいと思いました。あとはICTの機器を導入して積極的に使っておられるのは、やはり若い先生が多くて、機器の扱いが上手な方がたくさんおられました。一つの教室に一つのタブレットが配置され、それをみんなで共有するということですので、利用に際してのルールもつくっておかないと、データの管理が大変だと思います。いずれは先生一人ひとりが自分の好きなように端末を使えるようにならないと、授業の準備をするのも難しいのではないかと感じました。

西橋委員：校長先生によって、いろんなタイプの方がおられます。私はざっくりばらんに話をしてほしいという気持ちで訪問させていただいていますが、そうならない時もあります。そうすると、その学校の先生方は、校長先生とどういう会話をしておられるのか心配になります。きちんとけじめはつけないといけません。校長と教員が、お互いに自分が言いたいことを言えているのかと思います。そのあたりをきちんとしていないと、学校でやっていることが上滑りしてしまうような気がします。

清水次長：小学校は六年間ございますので、低学年から六年生まで発達段階が違います。特に三・四年生におきましては元気で活発になっていく時期ということで、ギャングエイジと言われていています。基本的に低学年ではルールをしっかり守り、学校生活を身につけるといふ段階で、三・四年生は活発さを引き出しつつ、ルールを逸脱しないという段階であり非常に大事だと思います。高学年になりますと、自分の考えをはっきりと出して、中学校につないでいくという段階がありますので、そういう発達段階を理解した上でいかに授業や指導をしていくかというのは、非常に教師の力量の間われるところであると思います。

校長につきましても、確かに10年前20年前の子どもと今の子どもは違いますし、10年前20年前の教師と今の教師も違いますので、ベテランの教師と若い教員への対応も変えなくてはなりません。一番ポイントになるのは、学校として今の子どもや情報をどのように捉えて組み立てていくか、本質をいかに見抜いて指導していくかというのが大事なことだと思います。

西橋委員：どの学校へ行っても、下駄箱はきちんとしていました。靴が揃っているのに越したことはないのですが、子どもの変化を見つけるということが難しくなりつつあるのではないかと感じました。下駄箱を見ると、子どもの姿が浮かんできます。なぜこの子は乱れているのだろうか、ちょっと注意してみようか。とか、この子はかかとを踏んでいるな、何かあったのだろうか。といった思考が、今はげた箱を見てもできないです。今まで靴のかかとを踏んだらだめだぞ、

きちんと並べなさい、と指導してきましたが、あれも子どもを知る上では大事なことだったのだと思います。

教育長：西橋委員がおっしゃったように、下駄箱でも、挨拶でもそうなのかもしれませんが、それが手段ではなくて目的になっているのではないかと思います。

教育部長：現在、ICTであるとか校務支援などを導入しているのですが、10年先にはこれが整った状態ができていると思います。本来なら10年20年先に完成をするべきものを、コロナの影響により1年でやろうとしているので、いろんなギャップがここで生まれてきます。それが先ほどから御心配いただいているようなことであったりするのではないかという思いもしています。

トヨタ自動車が富士の麓で10年先20年先、あるいは30年先の社会をそこにつくろうという実証実験をされます。それがどのようなギャップを生むのか、恐らく企業として社会貢献の一環でこれをフィードバックしようということやっておられると思うのですが、今、そこまで先を読まなくてはいけない時代になってきたのかという思いをしています。

10年先のものがすぐ目の前に来ようとも、私たちはこれまでの伝統も含めて、しっかりとやっていけないといけないということを、1年たつてさらに強く思っている状況でございます。

教育長：市役所の1階にも来庁者の体温を測定する機器が設置されています。学校にもあると便利だと言う方もおられますが、担任が教室へ行って子どもの様子を見て、気付いてあげる。そういう目を持った人でなければ、教師をしてほしくないというのが本音です。オンラインの授業などは、主に緊急の窮余の策として考えるほうがいいのではないのでしょうか。先生が一方的に連絡するとか、子どもたちが家にいないといけない状況下であれば便利だと思います。

美濃部委員：今年ICT環境を整える予算がついて、無理していろんなことを進めたということもよくわかりました。そういう環境に慣れていくということも先生も学ばないといけないし、子どもたちも身につけないといけません。

今指導している教職を目指している学生が、子どもの変化に気付いて寄り添える先生になりたいということをよく言います。先生になって、ギャップに苦しんで潰れそうな子もいます。本当に若い先生は大変だと思います。

また教育長がおっしゃったように、字で書くということも大事にしてあげてほしいと思います。タブレットを使っているいろんなことができるのも大事ですが、お互いの顔を見て思いを伝えることが大事なのだということを、教員も子どもも共通理解した上で、強烈に進む社会に何とか対応していく。両面見ていけないといけない極端な時代ですね。

教育部長：長い時間かけて進んでいくときは、順番に昔のものを捨てていけるのです。それで新しいものを入れられる。短くすれば、捨てる間がなく積み重ねていけないといけないので、忙しくなってしまいます。

教育長：委員の皆様にご出席いただく今年の卒業式では、例年とは違う部分もあ

と思いますが、子どもたちの船出の式でございますので、よろしくお願い致します。

8. 閉会

教育長から閉会宣言があった。